

記念誌への投稿

不思議な塗料「漆」の魅力

阿佐見 徹 (高20)

1、はじめに

ご存知のように漆は幹に傷を付け、滲み出た樹液を掻き採り塗料として使います。福井県鳥浜貝塚遺跡出土の漆木材が年代測定の結果、世界最古で12千年前と確認されました。日本では自生できないとされ、大陸からの渡来人が持ち込んだか植えたものと考えられます。漆塗製品の出土はそれより後、約55百年前(縄文前期)の漆塗櫛となります。漆文化は縄文時代に始まり、以後時代が遷っても日本文化の中心に位置し続けています。

私は日本独特の文化として連綿と続く、不思議な塗料「漆」の魅力に引き付けられました。



<樹から滲み出る漆液>

2、漆との出会い

その魅力に出合ったのは高校時代、後に彫金で人間国宝に認定された増田三男先生の授業でした。先生は優れた工芸品に触れること、それがどのように作られるか考えることの大切さを印象深く語ってくれました。さらに実際に数々の優れた工芸品に直接触れる貴重な機会を作り、視覚や触覚など五感を使って、単なる知識だけでなく深い観察力を培うことが大切だと教えてくれたのだと思います。リュックを背負い所蔵品を持参、実作品を前にした授業は工芸の魅力や作り手の思いに直接触れる貴重な時間となりました。

その中に独楽塗の小さな色漆の香合がありました。人間国宝増村益城氏の作品で見た瞬間、その小さな工芸品の塗りの美しさと手触りに魅了されてしまいました。どのように作られたのかが出発点で、紹介された松田権六著「うるしの話」を読み、東京の三越で開催されていた日本伝統工芸展で漆の作品に接し、どんどん漆の魅力と不思議さに引き込まれ、その道に進みたいと思うようになりました。大学も芸術系を選び、京都へ来て、漆にかぶれながらもモノづくりの道を追求、漆に関わり続け、不思議な塗料である漆の魅力や普及に力を注ぐ仕事に就くことができました。「どんな仕事でも10年間やり続ければ1人前になれる」と、続けていくことの大切さを説いてくれたのも先生でした。

3、漆の魅力

谷崎潤一郎は「陰翳礼讃」の中で「第一飯にしてからが、ぴかぴか光る黒塗りの飯櫃に入れられて(中略)あの炊きたての真っ白な飯が、ぱっと蓋を取った下から煖かそうな湯気を吐きながら黒い器に盛り上がり、一と粒一と粒真珠のようにかがやいているのを見る時、日本人なら誰しも米の飯の有難さを感じるであろう。」と表現しています。米飯とそれを入れた漆の器を対比させた美の表現は日本人の心の深層部分に触れるものです。残念ながら飯櫃を使うことがなくなった現在、この感覚は失われつつあるかもしれません。しかし、そこには塗物を好み、使い続ける日本人の美意識が潜んでいる気がします。

南蛮漆器と呼ばれる桃山時代に始まるヨーロッパ向けの輸出漆器は当時貴重な貿易品として人気を博しました。その頃のヨーロッパはセラックニスと呼ばれる透明塗料を使った塗製品が主流で、漆黒に彩られた南蛮漆器は人々に驚異の塗物として喜ばれたようです。更にそれらには黄金に輝く

蒔絵が施され、黒い漆との対比が醸し出すエキゾチックな貿易品として当時の王侯貴族達を夢中にさせました。現在でもヨーロッパには数多くの漆工品が残り、遙か彼方の極東にあるジャパンという国からもたらされた貴重な品として珍重されています。

4、二つある漆の黒塗

漆の黒は美しい深みのある独特な黒とされ、鉄と化学反応させて着色します。顔料（カーボンブラック）を加えて調製する合成樹脂塗料の黒とは異なる質感を持っています。

この黒には仕上げ法が違う二つの塗法があります。一つは「蠟色(ろいろ)塗」と呼ばれ、最終の上塗り後、研磨炭で平滑に研いで研磨材で磨き上げる。ここまでは合成樹脂塗料の磨き仕上げと同様に「蠟色塗」はこの後、樹から採ったままの良質な生漆を綿で薄く拭き伸ばして乾燥室に入れ、固まる直前に油と磨き粉で余分な漆を除くように艶を上げます。これを数回繰り返すことによって漆独特の鏡面が作られます。吸い込まれるような深みと黒味を持ったこの鏡面は、高級車や高級ピアノに用いる合成樹脂塗料の目指す理想的な仕上がり面と言われます。両者を見比べた時、必ずやその違いに気づかされるでしょう。

もう一つは「真塗(しんぬり)」と呼ばれ、上質の上塗漆を刷毛で塗り放し、そのままを仕上げとするものです。漆は湿気のある環境で自身が持つ酵素の働きで酸化重合し硬化します。その時表面が漆エマルジョンの分散状態を反映するように、独特のむっくり(あたたかい、やわらかい、厚みのある)と表現される質感に仕上がります。これは硬化過程で出現する表面の微小な凹凸が、独特な半艶のちりちり感と光の散乱や干渉による色味を感じさせ、やわらかさやあたたかさを演出するのではないかと考えます。さらに器物の角は漆の表面張力により薄衣を纏った様に丸みを帯び、やわらかな厚みを感じさせます。この塗肌が漆独特で最大の特長と言われます。塗りの美しさに着目したのが利休を祖とする茶の湯文化で、利休は塗り放しを真の塗りと呼んで好んで用いたようです。きらりと光る澄んだ深みを持つ「蠟色塗」との対極に、「真塗」のむっくりとした美しさがあります。

5、おわりに

塗りには他に朱塗、溜塗、一閑塗、布目塗、布摺塗など様々な技法があり、加飾技法では蒔絵や沈金、螺鈿、平文などが日本の伝統的技法として連綿と受け継がれています。この拙文を機会に、それらに触れていただけたら幸いです。

近況報告 石川仁一（高 22）

平成 28 年 3 月に長年勤めた洋菓子会社を定年退職後 1 年弱、失業手当受給後、翌 29 年 4 月より加古川市にある加古川市商店街連合会の事務局に再就職しました。満 65 才にしての転職です、皆様のご参考になるとは思えませんが、身の回りのあれこれを 駄文で綴ります。

加古川市は瀬戸内海に面した兵庫県は東播磨と呼ばれる地域で姫路市の東隣り、面積 1 3 9km² 人口 26 万人の地方中堅都市、面積で言えば深谷・加須に匹敵、人口なら草加・春日部をわずかに上回るくらい。

一方兵庫県と聞いて皆さんが思い浮かべるのは神戸・姫路・淡路島、強いてあげれば有馬温泉・城崎温泉くらい、加古川市の何と影の薄いことか。さて、私の住む明石市はその加古川の東隣りで、求職中に明石ハローワークでたまたま目にした求人票「商店街に係わる事務全般、社員待遇」が目に入り、応募したところ 5 名の中から運良く採用となった次第です。

地方都市の商店街は存続の危機にある

事務全般と言っても事務だけやっていたら良いわけがなく、自らのポストを維持する＝商店街を存続させる・・・ことが暗黙かつ究極のミッション



となるわけですから。下見の時から気がついてはいましたが、商店街はシャッターを下ろしたまま

の店舗がとても多い。区画によって営業を続ける店が半数にも満たない。これじゃあ早晩、ポストがなくなってしまうのか！

さて商店街連合会は文字通り、二つの商店街から構成されている。加古川市駅前通商店街＝ベルデモール（35 店舗）と寺家町商店街（35 店舗）、両者は歴史も業種構成も大きく異なっている。



寺家町商店街

シャッター店舗とは

オーナーに直接聞いたわけではないが、営業を放棄する理由

- ①店舗を含む資産を世襲したものの、商いの苦勞はしたくない
- ②店舗は投資や節税のための金融資産でしかないのだらうと推測します。



オーナー不在のシャッター店



オーナーによっては、もろもろの経緯で地元ではなく彦根や名古屋あるいは八王子といった遠方

の方もいて、商店街への愛着は感じないだろうと思う。一方でシャッターばかりが目に入るこんな地方都市の商店街にも、起業したいので空物件を紹介してほしいという問合せが時々入ります。こうした mismatches の解消に取り組む動きは、これまでもいくつかあったようです。



まちづくり・みらい会議



空き店舗を若き起業家達が自前で改装

店主の高齢化と事業承継

商売を続ける中高年の商店主も総じて意欲が低く、さらに後継すべき子供たちも、商環境や立地に見切りをつけ大阪・東京の大都市でサラリーマン化してしまうことが多い。またこれまで大多数の行政がそうであったように、当市でも、たとえ意欲が低かろうとあまねく救済する護送船団方式支援がまかり通っていました。

アーケードの維持ができない



商店街（＝市道）の上部に半額とか75%とかの助成金で建てられたアーケードは、できてほぼ半世紀、建て替えるにも維持するにもましてや撤去するにも数千万から億の金が見積もられ、盛時から半減した組合店舗数ではとてもまかないきれない。

地域密着が、商店街再生の鍵？

(明日への希望)

大型店とネット通販には、とても太刀打ちできそうにないのが厳しい現実だが、商店街を取り囲む駅近住民が住み続けているのも事実。

地域密着に鍵があるのかもしれない。

「商店主が売りたいモノ」から「顧客がしたいモノ」へ視点を移してはどうだろうか？



イベントを媒介に、近隣の老若男女が交流できる場を創り、顧客に「ここは私のまち」と感じてもらう。

高尚な理論より行動が先、同志を募り地域の特性に応じた運営で商店街再生と雇用創出に繋げられるよう、微力を投じていきたい私の毎日です。



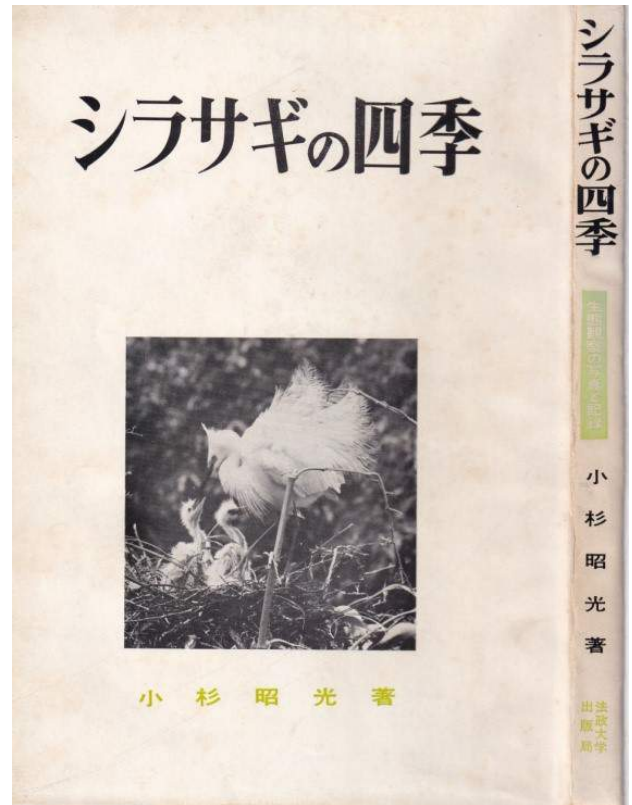
「動物と共に 65 年」

関 高樹 (高 23)

旧浦和市の街中でイヌ、ニワトリ、アヒル、小鳥、金魚、カメ、ヘビ・・・色々な動物に囲まれて育ち、浦和高校では生物部に所属し、大学は獣医学部へ、卒業後は念願のアフリカで獣医のボランティアをしました。その後も企業の研究所でマウス、ラット、モルモット、ブタ、サル、ゼブラフィッシュ等に関わっています。

旧制浦和中学卒の祖父は釣りや動物飼育の道楽に生きた人で、兄と私は祖父の愛弟子として、小学生の頃は大宮氷川神社の参道で購入した日光足白鶯（最高級ブランド）を正月に鳴かせる技を伝授してもらったり、調宮神社近くで購入したランチュウやオランダ獅子頭などの金魚を繁殖させるために、柱時計の発条で作った道具で溝川に棲むイトミミズを採り浄化して与えたり、武蔵野の雑木林で捕らえたシマヘビを馴らして持ち歩いたり、動物の基礎知識は祖父から楽しく学びました。

浦高では小杉昭光先生に師事して生物部に所属し、部室の裏にあったハト小屋で天然記念物のシラコバトの人工繁殖に取り組みました。また、放課後自転車で野田のサギ山に通いシラサギの生態観察をしたり、毎年夏休みには秩父の雁坂峠で合宿したりと、3年間部活に励みました。生物部には、植物、昆虫、野鳥等興味の異なる多才な部員が在籍し、卒業後も同期の邑田君は東大小石川植物園の園長に、川村君と高木君は医師に、益子君は医薬研究者にと皆生物系に進みました。



<シラサギの四季：小杉昭光著>

大学は自然豊かな北海道を選び、北大獣医学部に進みました。元浦高山岳部の安武さんや富岡君ら山の仲間達と温泉研究会を立ち上げて、雪渓でスキーに興じ、山間の沢に湧く温泉に浸かり、珍しい動植物を写真に収めるなど北の自然を満喫しました。その間にアフリカで獣医として働く夢を持ち、卒業後、青年海外協力隊に参加してザンビアの Central Veterinary Research Station に赴任しました。

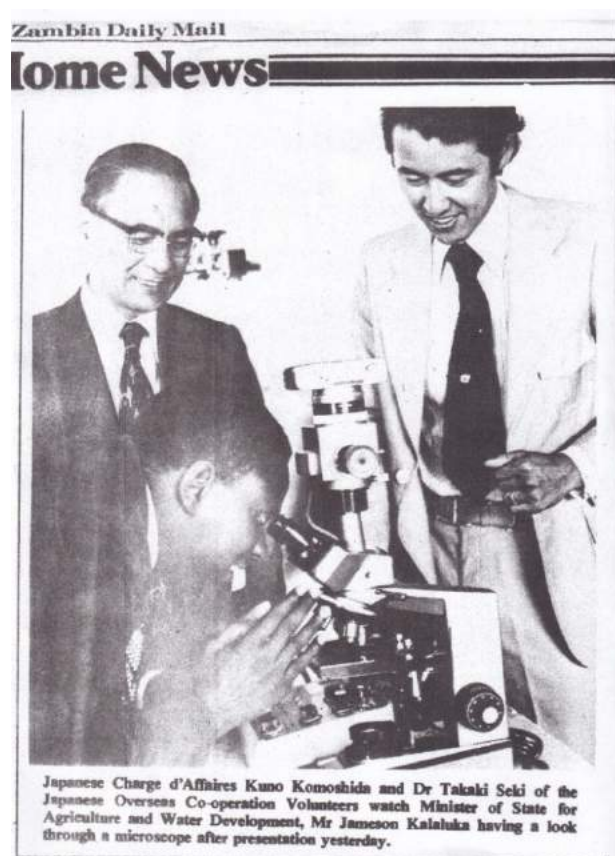
そこでは家畜や野生動物の伝染病の病理診断に携わり、狂犬病、口蹄疫、パストレラ感染症、リフトバレー熱、トリパノゾーマ感染症等々、日本では出来ない貴重な経験を積む機会に恵まれました。

また、休暇にはボランティアの同期とタンザン鉄道や地元バスを乗り継いでタンザニアやケニアを旅行し、セレンゲティー国立公園で野生動物の写真を撮ったり、キリマンジャロ登山をしたりと充実した2年間でした。

帰国後、母校でザンビアの伝染病や畜産事情について話す機会を設けて頂き、先生方にアフリカの獣医学的な魅力をアピールしました。その後しばらくして、北大を中心にザンビア大学に獣医学部を設立する JICA プロジェクトが発足し、浦高・北大と同じ道を歩んだ兄も JICA 専門家としてザンビア大学獣医学部で教鞭をとるなど、兄弟で発展途上国を支援したことは我が家の誇りです。

その後、住友化学、子会社の大日本住友製薬の研究所に勤めて、それぞれの事業を支える大型の除草剤や統合失調症薬等の安全性研究に取り組み、実験動物たちの命に支えられて、食糧の増産や病気で苦しむ人々の社会復帰に関わることが出来ました。定年後も色々な動物と共に、生命科学の発展を支える仕事を続けています。

物心ついた頃から今日に至るまで、趣味に仕事に常に動物に関わって生きて来て、改めて動物たちに感謝する毎日です。



< 獣医器材贈与式典：右筆者 >

胆膵領域の内視鏡 近畿大学医学部奈良病院 内視鏡部 水野成人 (高 32)

浦高を卒業してもうじき 40 年になります。大学から関西に住み始め、そのまま京都、大阪、奈良、神戸と関西で働いてきました。その間、若干の寄り道はありましたが、ずっと取り組んできた胆膵領域(図 1)の内視鏡についてご紹介いたします。

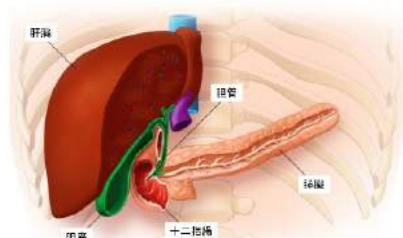


図1:胆・膵の構造

胆膵領域(図 1)の内視鏡についてご紹介いたします。

胆膵内視鏡との出会い

私は京都府立医科大学を卒業し、多くの仲間が大学に残って研修する中、大学と京都御所を挟んで向かい側にある京都第二赤十字病院で研修医となりました。この病院の消化器科部長が今は故人となられた中島正継先生で、胆管が十二指腸に開口するファーター乳頭を電気メスで切開し(内視鏡的乳頭切開術)、胆管にできた結石を内視鏡的に除去する治療を世界に先駆けて行いました。

この技術を発展させて、膵癌などで閉塞した胆管(胆汁の通り道である)にステントを留置したり、胆管や膵管の中に超細径の内視鏡を挿入して胆管や膵管の中を観察するような手技が次々に開発されました。さらに、内視鏡の先端に小さな超音波プローブを装着して膵臓や胆嚢を観察する超音波内視鏡という装置が開発され、京都第二日赤はその開発にも関わっていました。一般に内視鏡といえば、いわゆる胃カメラ・大腸カメラが知られていますが、私は胆膵領域の内視鏡を専門とすることになりました。

胆膵内視鏡の役割

胆膵内視鏡のターゲットとなるのは、胆管結石、胆管癌や胆嚢癌といった胆道疾患と、膵癌やそれ以外の膵腫瘍、慢性膵炎といった膵疾患です。胃や大腸は、内視鏡を口あるいは肛門から挿入することで、直接粘膜の表面を観察し、そこから

組織検体を採取することができます。しかし、胆道や膵臓を通常の方法で直接観察することはできません。胆・膵の検査としては、腹部超音波検査(エコー)やCT, MRI などがありますが、これらは体の外から胆・膵を画像化する検査法です。胆膵内視鏡は、胆管や膵管の開口部であるファーター乳頭を介して、あるいは胆・膵と接する胃や十二指腸の壁を介して、直接胆・膵にアプローチします。

具体例として、代表的な 2 つの手技をご紹介します。

閉塞性黄疸の治療

胆汁の通り道である胆管に結石や腫瘍ができて胆汁の流れが悪くなると、皮膚が黄色くなる閉塞性黄疸という状態になります。細菌の感染を伴う黄疸に加えて腹痛や発熱が生じ、患者さんは大きな苦痛を訴えます。この閉塞性黄疸の解除が、胆膵内視鏡の華ともいえる治療手技です。通常は内



図2:胆管結石の治療

視鏡的乳頭切開術を行って胆管の出口を広げます。結石が原因であれば特殊な処置具を用いて結石を胆管から取り出します(図 2)。

腫瘍や炎症による胆管の狭窄が原因であれば、そ

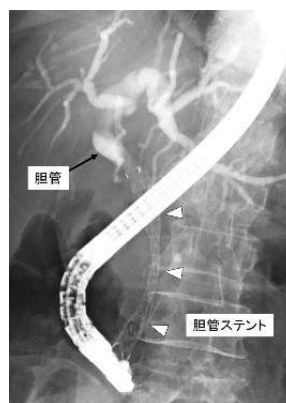


図3:胆管ステント留置

こにステントを留置して胆汁の通り道を作ります(図 3)。治療がうまくいけば、早期に患者さんの症状が改善し、黄疸も順調に治っていきます。一方で、この処置にはいくつかの偶発症のリスクがあります。切開部からの出血や、急性膵炎という

重症化すると生命にかかわる偶発症も時に経験します。胆膵内視鏡医は、手技が成功した時の達成感と偶発症への危機感を常に味わいながら過ごしています。

超音波内視鏡による膵癌の診断

消化器領域には多くの癌が発生しますが、中でも膵癌は早期診断が困難で、予後が極めて悪いことで有名です。膵臓の診断に重要な役割を果たしているのが超音波内視鏡です。膵臓は胃の後ろ側に接して存在し、膵頭部は十二指腸に取り囲まれています。ですから、胃や十二指腸からであれば、高い周波数を用いた解像度の高い超音波観察が可能になります。CTやMRIで1cmを切る腫瘍を描出するのは難しいですが、超音波内視鏡であればほぼ可能です。さらに、超音波内視鏡で観察しながら細い針を膵臓に刺し、腫瘍から組織を採取

して確定診断をつけることも行われています。このように、超音波内視鏡は膵癌早期診断の切り札となる検査ですが、専門的な技術を必要とします。健康診断やかかりつけの先生から、少しでも膵癌が疑わしい患者さんを専門施設に紹介していく仕組みづくりが重要な課題です。

おわりに 研修医を終え消化器内科を専攻してから30年、胆膵内視鏡の世界にどっぷりつかってきました。京都第二日赤で指導していただいた先生方、これまで勤務した病院でともに切磋琢磨した同僚や後輩医師たちのおかげで、ここまでやってこれたものと感謝しています。あと10年ほどで現役は終了ですが、気力と視力と手の細かな動作が保たれる限り、この道で後進の育成に努めていきたいと思っています。

浦和駅西口再開発における公共投資の効果、そして娘々

牛見 浩 (高 33)

関西浦高会発足 10 周年、誠におめでとうございます。その記念誌に寄稿するにあたり、やはり浦和に関することがいいだろうと考え思い浮かんだのが、私の大学卒論と娘々です。

昭和 56 年に浦高を卒業、2 つ目の銀杏のバッジは手に入れましたが、昭和 57 年に手に入れた 3 つ目のバッジは稲穂でした。経済学科で戦後日本経済を研究するゼミに入り、昭和 61 年に卒業するにあたり書き上げた論文の一部をここに記します(斜字部分)。

浦和駅西口再開発における公共投資の効果はじめに

戦後日本の高度経済成長を考察する上で、建設投資を中心とする公共投資の果たした役割を忘れることはできない。政府はこれまで景気対策の柱の一つとして公共投資に力を入れ、大きな予算を割いてきた。しかし、近年の低成長と巨額の国債を抱える赤字財政という状況の下で、公共投資という言葉の持つ響きもだいぶ変化してきたようである。

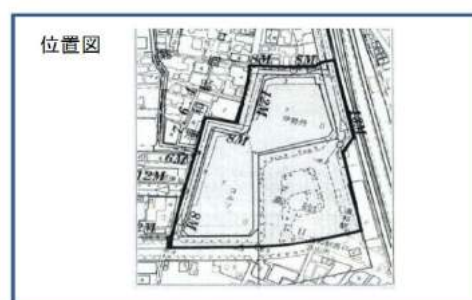
(中略)

こうして、社会資本の充実、安定成長の持続、民間活力導入による内需の拡大、都市再開発の必要、といったキーワードから、民間活力を導入した公共投資による都市再開発というテーマが浮びあがってくるのでくるのである。つまり、近年の公共投資が都市再開発においてどのような効果を上げているのか、民間活力はどのように導入されているのか、という点について、特に昭和 53 年に着工し、昭和 56 年に完了した浦和駅西口再開発を例にとって実証分析していこう、というのがこの研究論文の目的である。

今読み返してみても、なかなか面白いテーマだと自画自賛しています。ちなみに、この浦和駅西口再開発というのは、「浦和駅前市街地改造事業」と

いうのが正式名称で、概要は以下の通りです。

| 概要 | |
|-------|---|
| 地区名 | 浦和駅前地区 |
| 施行者 | さいたま市(旧浦和市) |
| 所在地 | さいたま市浦和区高砂一丁目の一部 |
| 地区面積 | 約 2.1 ha |
| 事業期間 | 昭和 47 年度～昭和 56 年度 |
| 用途地域等 | 商業地域(90/800)、準防火地域、高度利用地区 |
| 地区の概要 | 埼玉県の県庁所在地である旧浦和市は、県の政治、文化、経済等の中心として、また教育施設の充実した文教都市として成長してきたが、首都圏 30 km 圏に位置するため、首都圏への通勤、通学者を主体に住宅建設がさかんである。当該地区は、J R 京浜東北線浦和駅の西口に位置し、住宅地の発掘にともない、商業、サービスの中心地として今日に至っているが、駅前広場等も未整備であり、また、老朽化した家屋の商店や住宅が混在していた。なお、県内で最初の再開発事業となった地区である。 |



施設建築物の概要

| 街区名 | A 棟 | B 棟 |
|--------|---|---------|
| 敷地面積 | 5,507㎡ | 4,668㎡ |
| 建築面積 | 4,677㎡ | 4,098㎡ |
| 延床面積 | 44,882㎡ | 40,582㎡ |
| 容積対象面積 | - | - |
| 建ぺい率 | 85.00% | 88.00% |
| 容積率 | 750.00% | 798.00% |
| 構造 | 鉄骨鉄筋コンクリート造 | |
| 高さ | 約 4.0 m | |
| 規模 | 地上 7 階、地下 3 階 | |
| 用途 | 機械室(地下 3 階) 駐車場(地下 2 階) 百貨店、専門店、銀行 (地下 1 階～7 階) コミュニティーセンター、 百貨店(地上 7 階) | |
| 住宅戸数 | 0 戸 | |



第1章 公共投資の効果

第2章 都市再開発の効果

第3章 浦和駅西口再開発の実証的分析

1. 概要

埼玉県旧来の都市である県都浦和市は、旧街道筋・中山道の宿場町として栄え、その後明治以降の鉄道駅の開設により発展してきた都市で、中心市街地はこの時期に形成された。第二次世界大戦後の経済復興から高度成長期における東京への人口・産業の集中は、埼玉県への急激な人口流入をもたらした。浦和市も市街地のスプロール化(虫食いのように都市の住宅地が無計画に郊外に広がること)とともに短期間に膨張する結果となったのである。しかしながら、このような都市の成長に道路、公園、下水道などの公共施設の整備が追いついていかず、特に浦和駅周辺部においては、駅前広場もなく旧態然の細い街路と木造低層建物の密集市街地を形成していた。これらの都市問題の解消は、昭和30年代後半から埼玉県及び浦和市の共通課題であったが、人口の都市部への集中が鎮静化しつつあっても容易に解決できない状況であった。さらに「ゆとり」「うるおい」「アメニティ」といった快適で良質な街づくりへの住民のニーズが年々高まりつつあり、浦和駅西口再開発に対する期待は大きなものとなったのである。

そこで昭和38年、「浦和駅西口広場計画基本案」が策定され、昭和42年には埼玉県における都市再開発の第1号として「市街地の改造に関する都市計画の決定及び市街地改造事業についての都市計画事業決定」(建設省告示第3098号)がなされ、ついに浦和駅西口再開発の計画が具体化したわけである。その後、用地買収に手間どったり、伊勢丹進出に対して地元商店街からの反対があったりなどしたが、昭和53年12月6日に着工し、昭和56年3月26日に工事完了、駅前広場はこれまでの5.71倍になった。そして同年4月23日にCORSO・伊勢丹がオープンしたのである。

この浦和駅西口再開発の主な目的は次の3点である。

- (1) 県都にふさわしい表玄関の建設。
- (2) 駅前広場等の公共施設と、一体的な宅地の整備。
- (3) 建築物の高層不燃化。

このようにその目的は都市環境の向上が中心であるが、もちろん公共投資としての経済的效果もあったはずである。また、今年4月には完成5周年を迎えることもあって、建設完了後に発生する様々な効果も顕在化し、観測しやすいといえよう。

2. 効果評価とその分析

a 生産誘発効果-A

(後略)

と、この後論文では、投資・消費誘発効果-A、雇用効果-B、所得創出効果-A、効率化効果-C、建設コスト効果-A、ランニングコスト効果-A、福祉効果-C、文化効果-C、環境効果-Bといった各効果を評価していきます。

いち大学生の拙い考察ですが、浦和という街をいま一度思い出して頂ければ幸いです。

今も浦和駅近隣では、次の再開発が進んでいます。でも、娘々は変わっていません！



双日（株）会長・加瀬豊氏（高17）講演（2016年11月5日）

現在、同窓会副会長をやっております加瀬でございます。

先ほどお話がございましたように、昨日（11月4日）の午前4時にモスクワを発ち、今朝（11月5日）7時頃羽田に到着いたしました。この関西浦高会に間に合いほっとしております。

合併に縁

私は現在、双日という商社の会長をしております。双日は2004年にニチメンと日商岩井という共に関西、神戸、大阪の出身の商社が合併した会社です。私は1970年、昭和45年に日商岩井に入社しました。この日商岩井も合併会社で、鈴木商店の流を汲む日商と岩井産業の合併会社で、私が入社する2年前の1968年10月に合併し、私と同期が、日商岩井人事部が採用した第1号の社員となります。

また、アステラスの社外取締役もやっておりますが、アステラスも大阪出身の山之内と藤沢薬品が合併した会社です。どうも、合併に縁があります。

学生時代に影響を受けた事



簡単に浦高から大学へ、そして入社
の経緯を、簡単にお話させていただきます。

私の浦高時代は、一言で、目立った何もしてない学生という感じでございます。川口市立仲町中学校を出ました。まだ新しい中学校でしたけれども、この年だけ、たまたま7人受験して6人が浦和高校に入りました。

浦高で、あまり勉強してなかったせいで、先生は2人しか覚えておりません。ゲルマンという松本等先生と、工芸の増田光男先生、82歳で、彫金で人間国宝になられた方で、数年前に100歳で大往生でお亡くなりになったと思います。この方の言葉で“好きだから努力する”という言葉があり、時々中学校の講演なので使わせてもらっています。

同窓会も、川野会長が、2年前に会社に用事があるということで訪ねてこられ、会長の話が持ち上がりました。私には相応しくないのですが、その場でお断りし、副会長としてお手伝いすることを約束し、会長に相応しい人物として同期の三菱地所の木村会長を紹介し、この6月はれて、木村会長が誕生したと思います。

実は、高校時代、私は剣道部で剣道2段まで行きましたが、2年の3学期に、病気をして学校を休み、3年はほとんど棒に振ったという感じです。成績も、多分100番前後かなと思います。不思議ですけれども、浪人して、当然予備校にかよいますが、予備校の相性がすごく良くて、なぜか予備校の試験の成績が良くなってきて、いつも上位にいるということで、予備校から東大受験条件で特待生にしてもらい、授業料も免除してもらいました。幸い、大学に入れました。

そのころの大学は、学園闘争の真っ盛りで、3年生の時に安田講堂の攻防戦があったのを、ご記憶があると思います。それで、ほとんど授業は、やってない。勿論、試験はありましたけれども、そういう時代でございました。

ここでも、剣道部に入りまして、剣道とゼミだけはやったという記憶でございます。

商社マンとして

商社へは、海外で働いてみたいなど漠然とございました。大学の剣道部の先輩が、引っ張りに来て、私は日商岩井が商社だと知りませんでした。近くの“べに花”というステーキ屋で、ステーキ1枚をいただいて、義理を感じて入ってしまったという事です。

ステーキ1枚で入った商社ですけれども、幸い46年間働きまして、現在ほとんどラストスパートというところですよ。

そのうち15年海外生活をしていました。アメリカに12年半、ニュージーランドに2年半の15年でございます。長いアメリカは、シアトルに6年半、ポートランドに2年、ニューヨークに3年、ボストンに4ヶ月というところでございます。

長い商社マン生活の中で、非常に様々な外人と接してきましたが、やはり日本、日本人が、今一番

誇れることは、約束を守る、契約をきっちり履行する。世界で1番、信頼されている民族ではないか、企業ではないかと自負しております。

日本人は、日本企業は稟議書とかがあり、非常に決断に遅いというのは、ある意味では欠点で、非常にプッシュされることが多いですが、一度契約するときちんと最後までやるということは、相手方も、よくわかっていまして、日本人と基本的にはやりたい、仕事をしたいということが結構ございます。

それから又、日本は、技術、質の高さが日本の誇れるところじゃないかと思っています。日本のただ、120パーセントの質を作るということで、コストが高いということ、作ったものは非常に立派だという事です。(質は高いがコストも高いということで、新興国などでは敬遠されることも多々あります。)

ただ、杭が“短かったり”ということで、時々そういうことがあります。今まで堂々としゃべっていたのが、多少、日本もあるんじゃないかといわれかねないので、よろしくないと思っております。

グローバル人材の育成

浦高の話ですけれども、グローバルの関係で浦高は平成26年にスーパー・グローバル・ハイスクール(SGH)に指定されまして、グローバル人材を育てていく高校ということで文科省から指定されているわけですが、同窓会もそれに呼応して奨学財団をつくったことは、皆さんご存知の通りです。私の経験からも、一人でも若いうちから、高校生の時から海外に留学する、また、それを助けに行く、選ばれた高校生は、将来、本当にグローバル人材として活躍していくんじゃないかと思えます。

今後、世界の時間軸が短くなり地域間の距離が短くなる、フラット化していまして、いろんなグローバル人材、世界で渡り合っている日本人を、必要としていると思えます。

グローバル人材という言葉は、実は、アメリカにはございません。一生懸命それを言っているのは、グローバル化の遅れている日本であって、アメリカでは、幼児の時より、小学校なんかは毎日ですね、“Show&Tell”とって自分の物を持ってきてみんなに向かって、これは父親からもらったもので、私はどういうふう大切にしているかという簡単などころから始めて、自分の物をプレゼン(表現)し、それに対して集まっている皆がいろ



いろ質問する、それを先生が横で聞いている。絶対にけなさない、ほめて、ほめて、言わして、それで、だんだん小学校1年、中学2年、3年と段々高度になって自分の主張をする、人の意見を聞く、という繰り返しをずうっとやって、自律的なプレゼンができるということになります。それから、そうやって育てていくわけですので、中学1年生のころには、自分の意志で堂々と、将来どうしたいとか、そういうことを、ものすごくよくしゃべることができるようになる。

また、大学教育が素晴らしい訳です。アメリカの大学の一番の特徴は、専門性が高いということ。どの大学のどの専門課程を出たか、ということで給料が変わるくらいに。これは、日本とまったく違う。どの大学どの学部を出ても同じ会社に入ったら同じ給料というのとは違う。大学を出たときから給与差別がついているという事、それはなぜかという専門性の違い。それからアメリカは、人種のるつぼで、多様な人種と付き合いという事に、基本的に慣れている。

アメリカの場合は、大学を卒業すると、そのまま世界中どこに行っても働ける人材に育てている。日本は、だいたい会社に入ってからいろいろ鍛えられて仕事を覚えていくというスタイルでありますので、だいぶ違う。お子さん、お孫さんがいて、世界で働かせたいと思えば、海外に出すと

いうこと。ただ、海外の大学の費用がやたら高くなり 2 千万、3 千万卒業までにかかるということで、日本の留学生が減っているんですけども、単純にやる気が、外に出て頑張る必要がないというような意識の若者が増えたという事もあります。もう一方では、お金が、結構大変です。したがって、奨学財団みたいなのを、いろいろなところで作っていかないと、なかなか、日本人の留学が増えないと思います。

まとめですけれども**グローバル人材 3 要素**は、

1. 自立 自分の言葉で自分の意見を言う
 2. 専門性を持つ
 3. あらゆる人種、民族、宗教を受け入れる
- これは、日本人は非常にすぐれていまして、ほかの人種に対してそれほど偏見を持っていないと思います。それら 3 つの要素の土台として、英語力は最低限必要、ということで、この 4 つを兼ね備えなければいけない。

帰国しない子女

私は“帰国しない子女”という言葉で、4 年前に作って、日経新聞夕刊の“明日への話題”に半年間寄稿したことがございます。そこで、一番のグローバル人材は“帰国しない子女”、帰国子女も言葉が達者で、日本の女子は、一番、世界でグローバル人材にあっているのではないかと。本当に鍛えられた女子は、向うの高校、大学を出ると、日本に帰ってこない。日本の“ぬるま湯”のような社会はいやだということで、向うで働いて独立して、結婚する。日本に帰ってこないの“帰国しない子女”という題をつけました。彼女たちが、一番のグローバル人材だと思います。

最後に、世界経済と日本という大きなテーマをいただきましたが、商社の立場からいろいろ話をしてみたいと思います。

トリプル A の時代

21 世紀は、トリプル A の時代と呼んでいます。トリプル A とは、アジア、アフリカ、そしてアメリカの頭文字をとったものです。

2050 年までアジアの時代が続くと思っています。

それから、2050 年～2100 年までアフリカの時代、ずっと通して、アメリカ時代は続くのではないかと。なぜかと言うと、21 世紀の終わりには人口は、100 億人位になっている。そのうちの 40 億人がアジア、中国、インド ASEAN 他です。40 億人がなんとアフリカ、残りが他の国です。日本は、少子高齢化ですけれども、アフリカでは人口爆発が起きていて、現在 12 億人で 2050 年に 20 億人、世紀末に 40 億人と、非常な勢いで人口が増えております。

アフリカは非常に巨大な大陸で、アフリカを、すっぽりと太平洋に持ってきますと、成田からサンフランシスコまで繋がるという東西の幅 7,400km ある。成田からサンフランシスコまで飛ぶと 10 時間かかりますが、アフリカの東西も 10 時間、南北はもうちょっと長くて 13 時間かかります。そういう巨大大陸ですが、国は 54 ケ国もある、ひとつひとつは小さいが、地域的な連合がどんどん進んでいます。人口に寄与した、たとえば自動車とか食品、世界のそういうメーカーが、今こぞってアフリカに行き、商売ができる環境になっています。アメリカは、メキシコ人含め年間 100 万人位 (300 万人とも言われている) が、ずうっと入ってきている、今 3 億ぐらいだと思いますが、4 億人ぐらいにはなるといわれています。アメリカが世界経済を牽引しているのは、やはりイノベーション、それから技術力で、シリコンバレーに代表されますが、イノベーションがどんどん進んでいる。現在はバイオ関係でも、やはりアメリカが一步リードしている状況です。心配しているのは、世界 100 億人となってくるので、地球環境とかが大丈夫か。非常に、医療も発達してまして、150 歳ぐらいまでは生きるようですので、一人二人頑張っていて残って、見届けていただければと。

経済環境

それから、最後になりますが、日本人のデフレマインドというのがなかなか消えない。若者が消費しない、買わない、結構贅沢をしない。

その反対側には、未来への期待とかが、薄いのではと、多少心配することもあります。平和な日本では1, 2パーセントの成長ぐらい。世界経済的には、Gゼロの世界と言われて、だれが主導を取ってやっていくのか。大国と言われた各国ともそれぞれ難問を抱えていまして、一国ではほとんど、何もできなくなっている状況です。

平和な国が発展

経済活動が一番スムーズに行われるのは、治安が保たれている平和な国、そういう国の経済、社会は発展すると思いますが、そうではない国は、まだまだ世界中にはいっぱいある。日本が一番平和な国じゃないかなと思っています。仕事柄、外に行きますが、日本に帰ってくると、本当に、どの国に行っても、やはりほっとするというのが、私の偽らざる気持ちです。

21世紀は商社の時代

アジアであれ、アフリカであれ、新興国が、経済、社会を発展させたいと思っていまして、そういう国々からは、日本の技術や信用力、資金を非常に欲しがっておりますので、我々商社にとっても、日本にとってもですが、非常に事業機会のある、事業機会の続く、すごくいい時期じゃないかということで、私は、21世紀、商社の時代でもあるということで、社員にも聞かせております。とりとめのない話で恐縮でございますが、これで、私の話を終わります。

(文責：関西浦高会・佐藤進)

